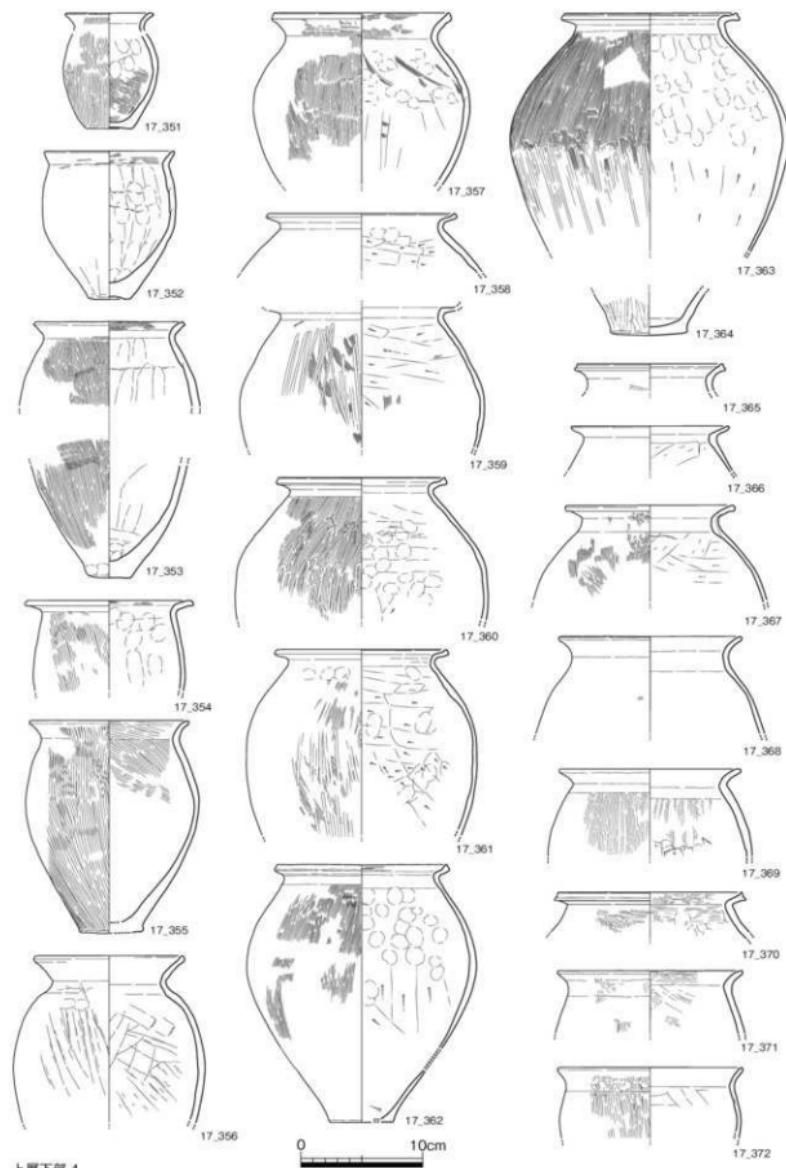
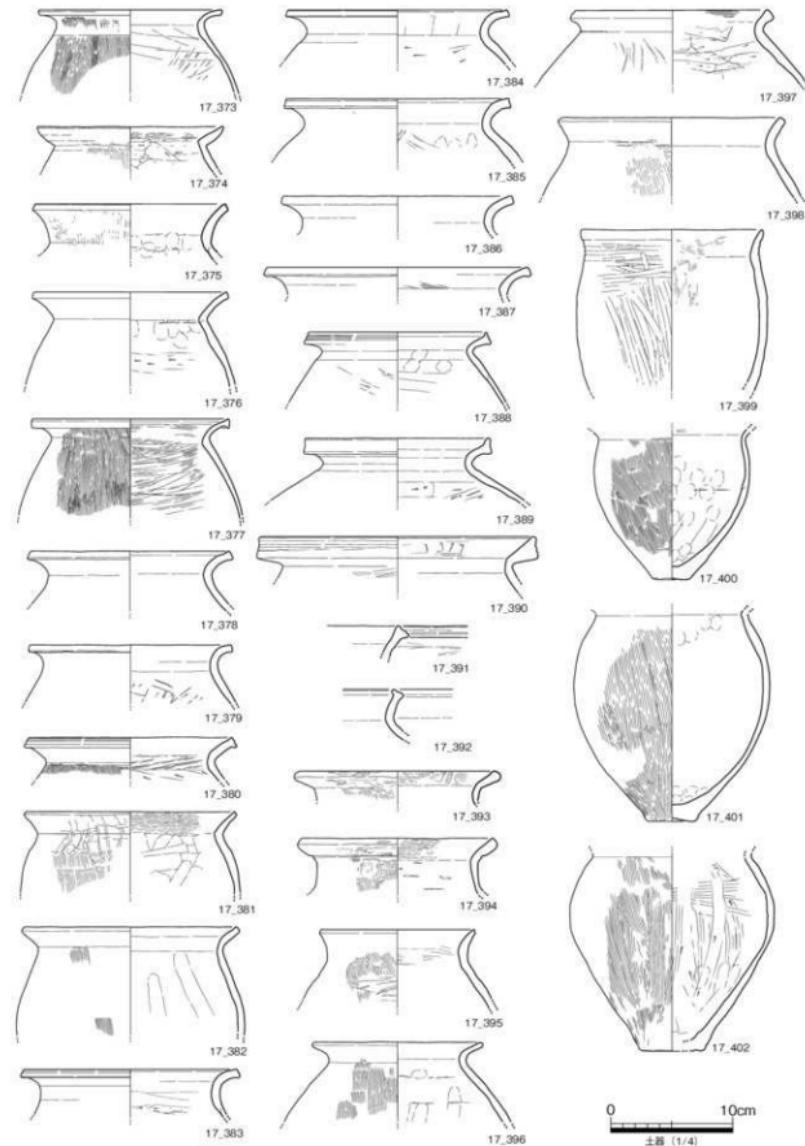


第36図 SD01 遺物実測図 12



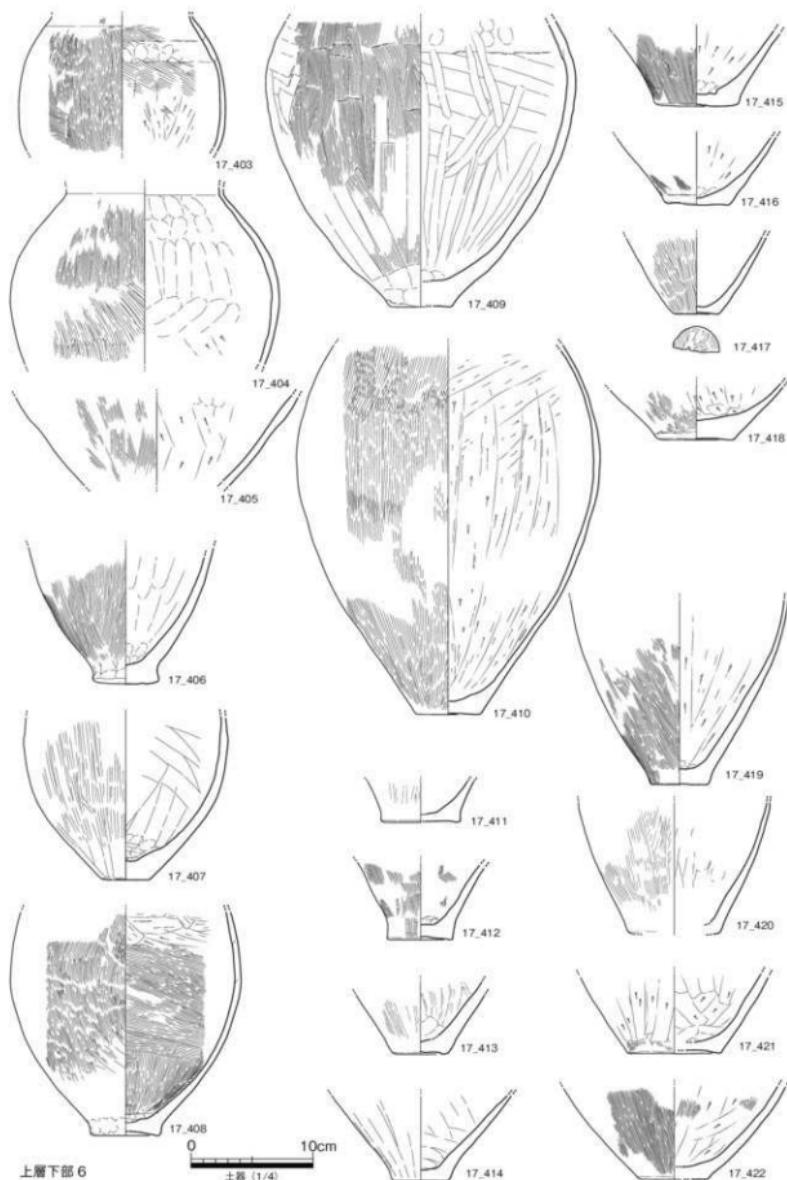
上層下部 4

第37図 SD01 遺物実測図 13

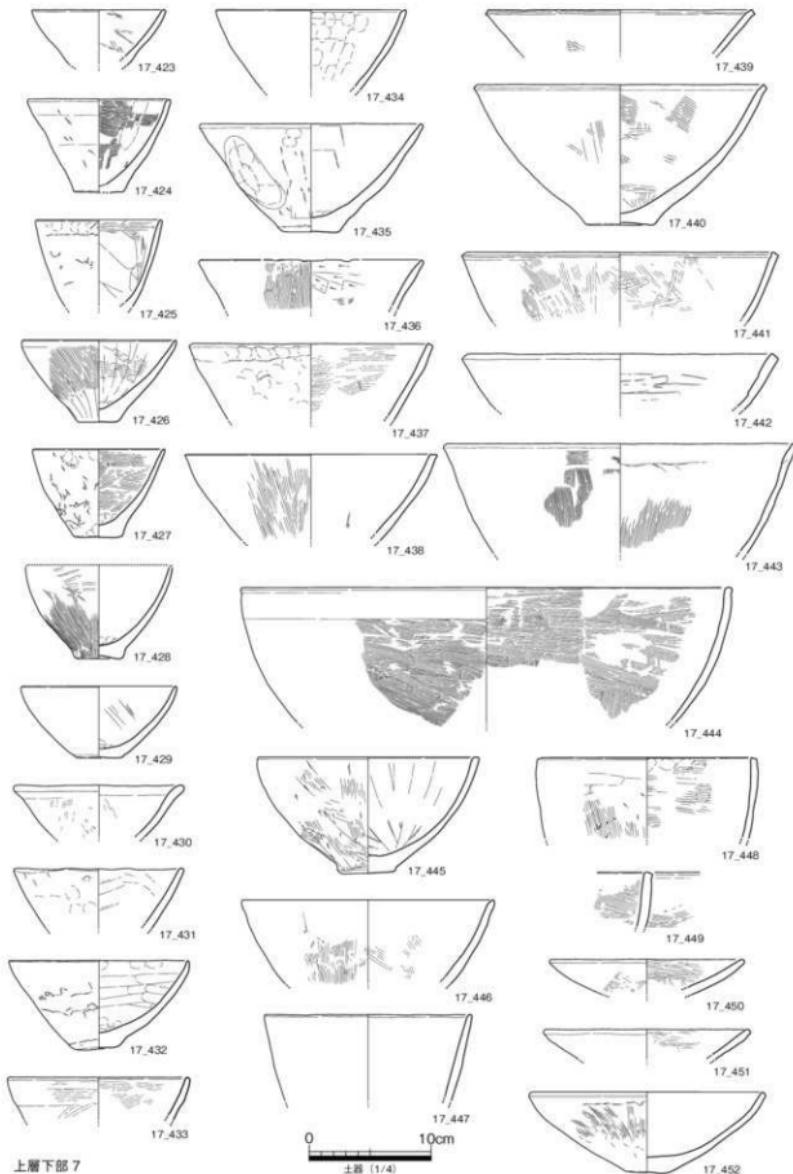


上層下部5

第38図 SD01 遺物実測図 14

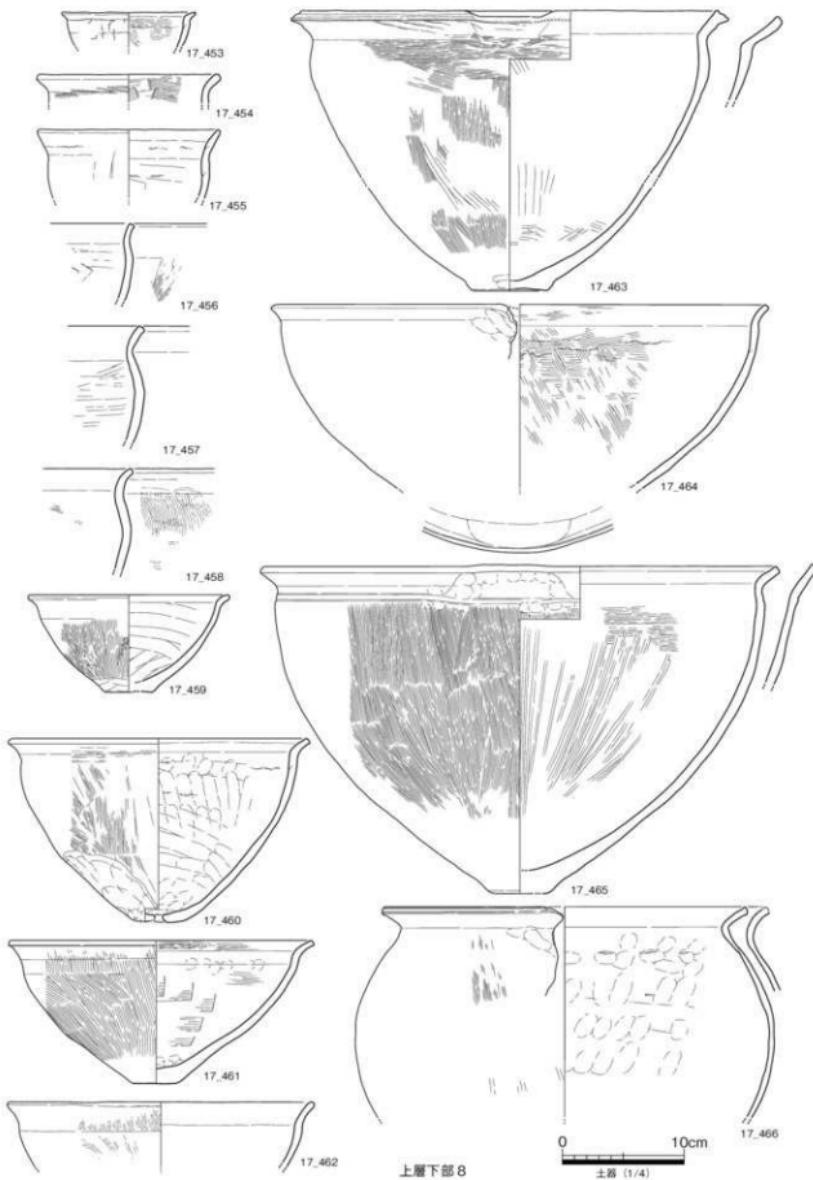


第39図 SD01 遺物実測図 15

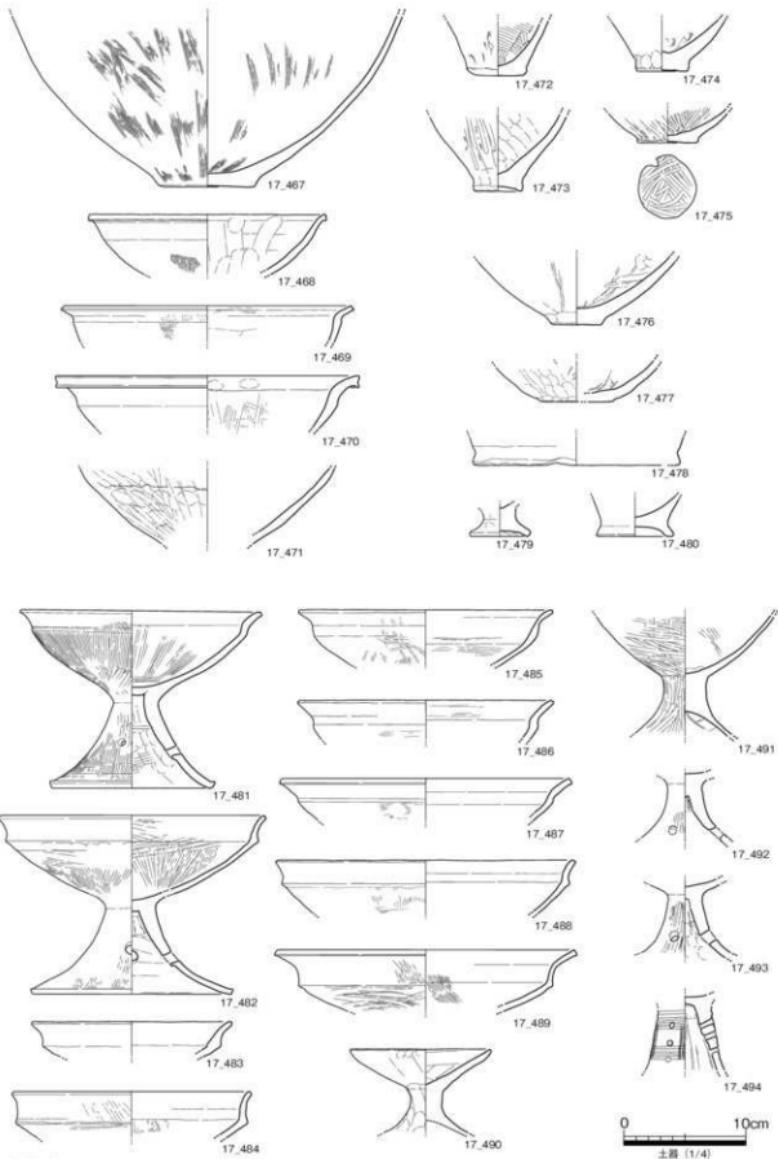


上層下部 7

第40図 SD01 遺物実測図 16

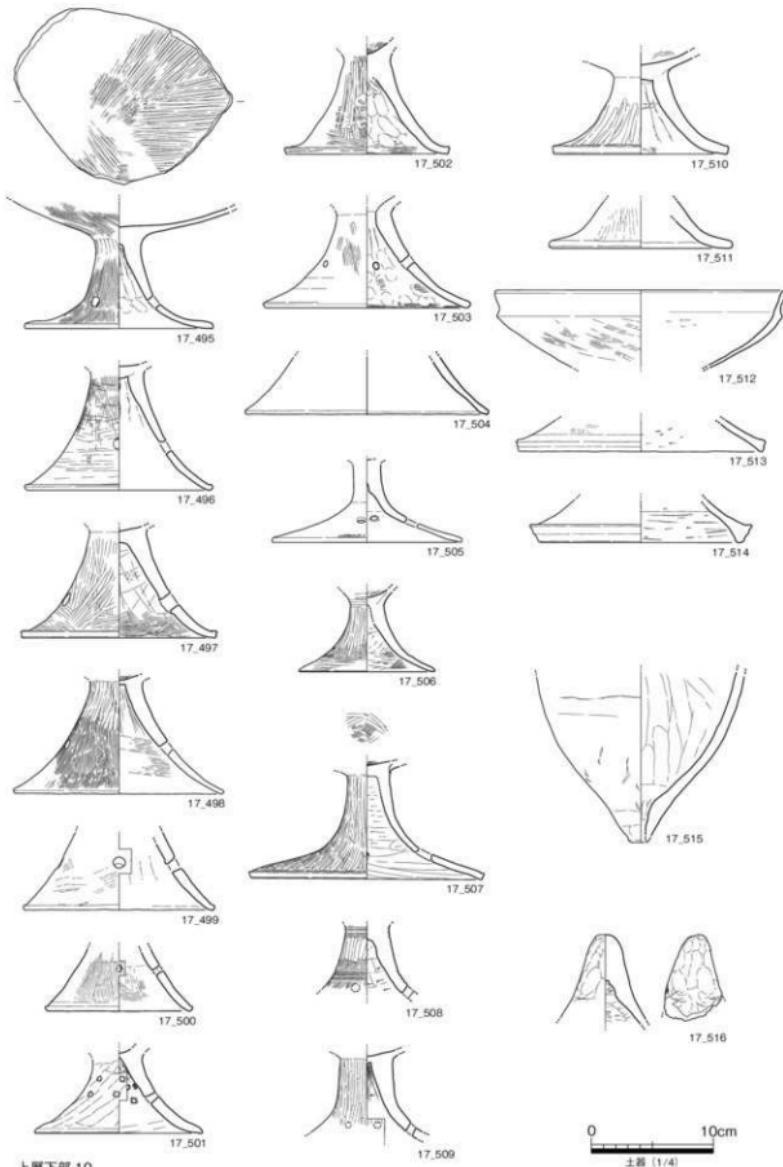


第41図 SD01 遺物実測図 17



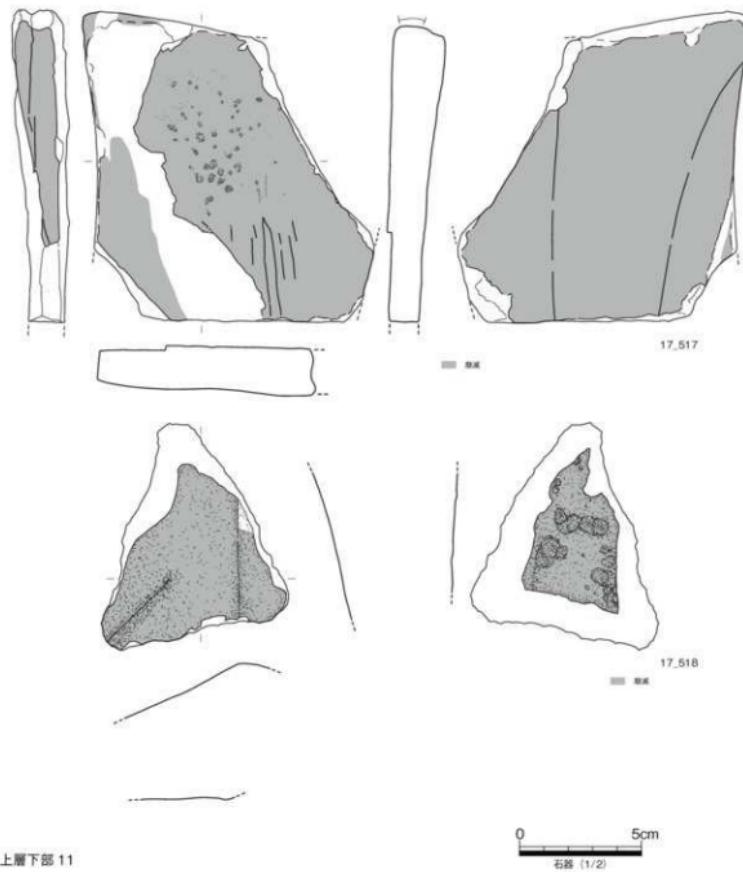
上層下部 9

第42図 SD01 遺物実測図 18



上層下部 10

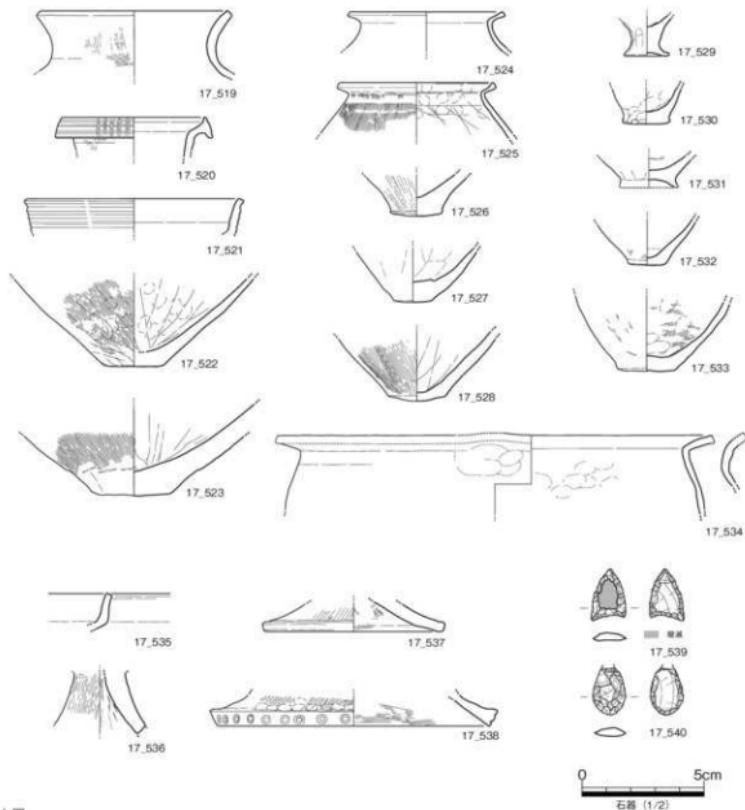
第43図 SD01 遺物実測図 19



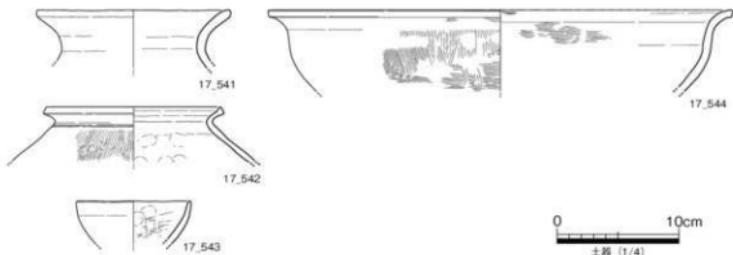
第44図 SD01 遺物実測図 20

## その他の遺構（第46図）

SP46は柱痕がある。SH01床面掘り下げ時に検出したもので、SH01より古い遺構と考えられる。弥生土器壺545が出土している。大型の壺の破片を4点図化しているが、同一個体と考えられる。

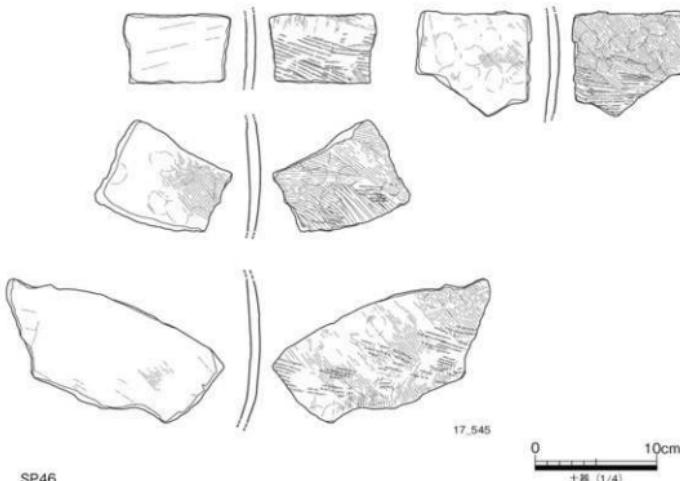


上層



層位不明

第45図 SD01 遺物実測図 21



第46図 SP46遺物実測図

## (3) 古代(第47図)

掘立柱建物跡、土坑及び出水状遺構が確認されている。

## 出水状遺構

## SX01、SD02(第48～51図)

土坑状のSX01から北へ溝SD02が接続するいわゆる出水状の遺構と考えられる。

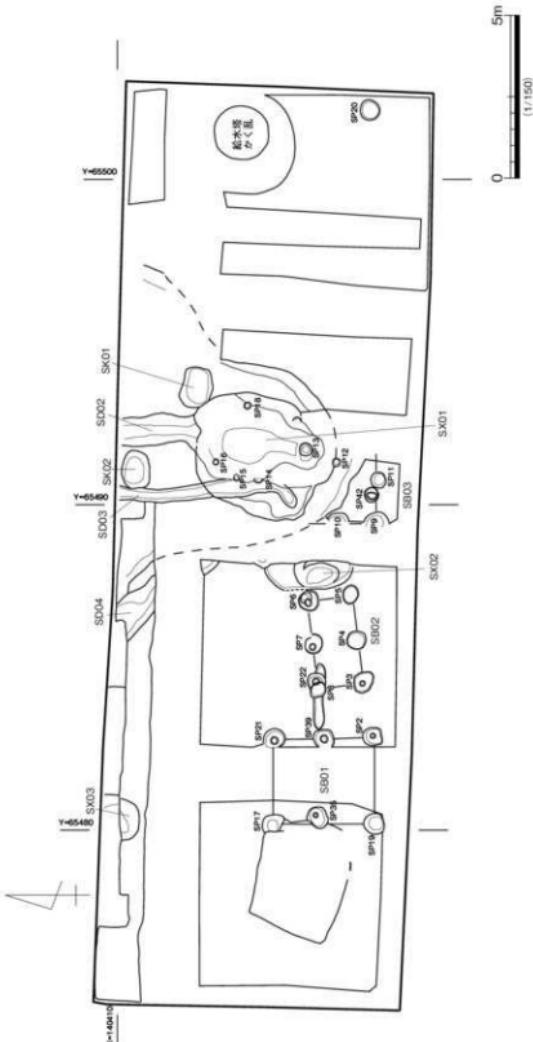
遺構検出面の基盤層は砂質土であるが、SX01底面の最深部からSD02への接続部分にかけては、基盤層が黄色系の粘質土となっている。最上層(5、6層)は中世以降の遺物を包含することから、中世以降にも再掘削が行われたものと考えられるが、より古い時期に2回の再掘削(下層、最下層に対応)が行われている。

SD02の埋土は、SX01下層から連続している。

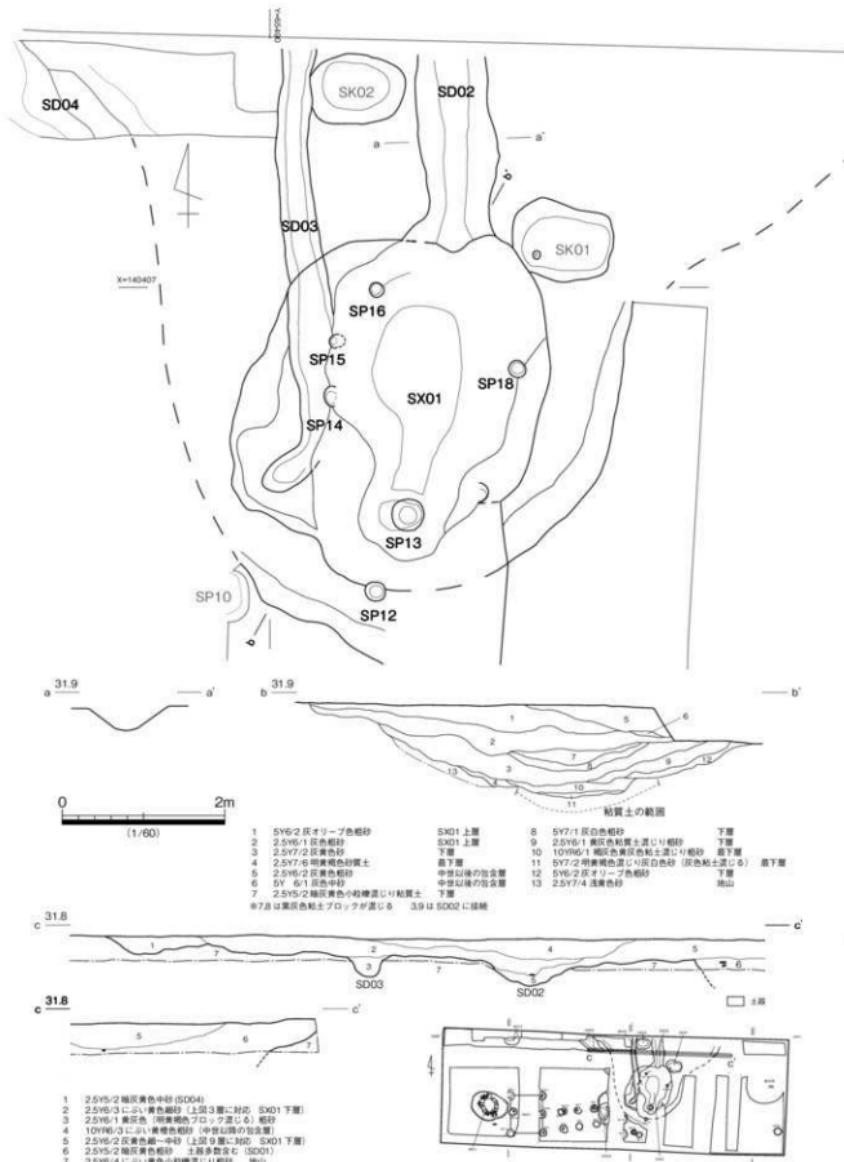
ピットはSX01の底面で検出したもので、SX01との関係は不明である。

SX01の出土遺物は、「最下層」から土師器546～550、須恵器551～553が出土している。550は中世の遺物で、混入品と考えられる。須恵器551・553から8世紀後半から末頃の時期が考えられる。「下層」からは、土師器554～560、須恵器561～578及び灰釉陶器皿579が出土している。土師器554は中世の遺物で、混入品と考えられる。その他の土師器・須恵器は、7～8世紀代のもので、灰釉陶器皿はK14窯式で9世紀前半の年代が考えられる。「上層」からは弥生土器580、土師器581～583及び須恵器584～586が出土している。同じく結晶片岩製打製石庵丁587が出土している。出土層位不明のものは、弥生土器588～590、土師器591～594及び須恵器595～600がある。

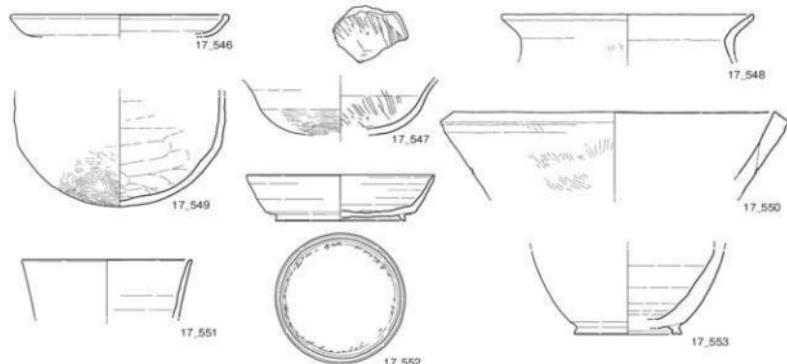
SD02からは、須恵器601・602が出土している。



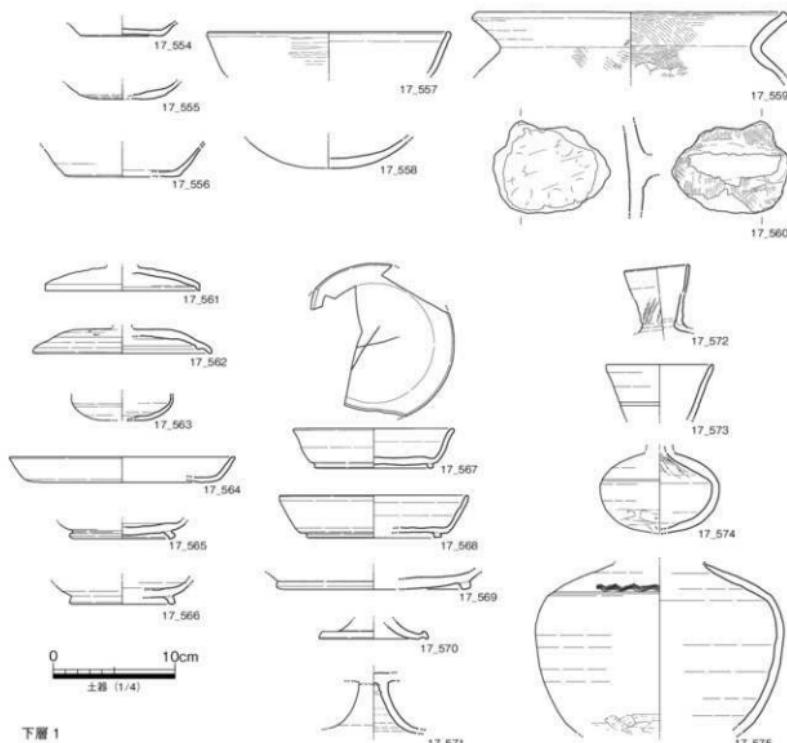
第47図 古代石橋遺構平面図



第48図 SD02・SX01平・断面図

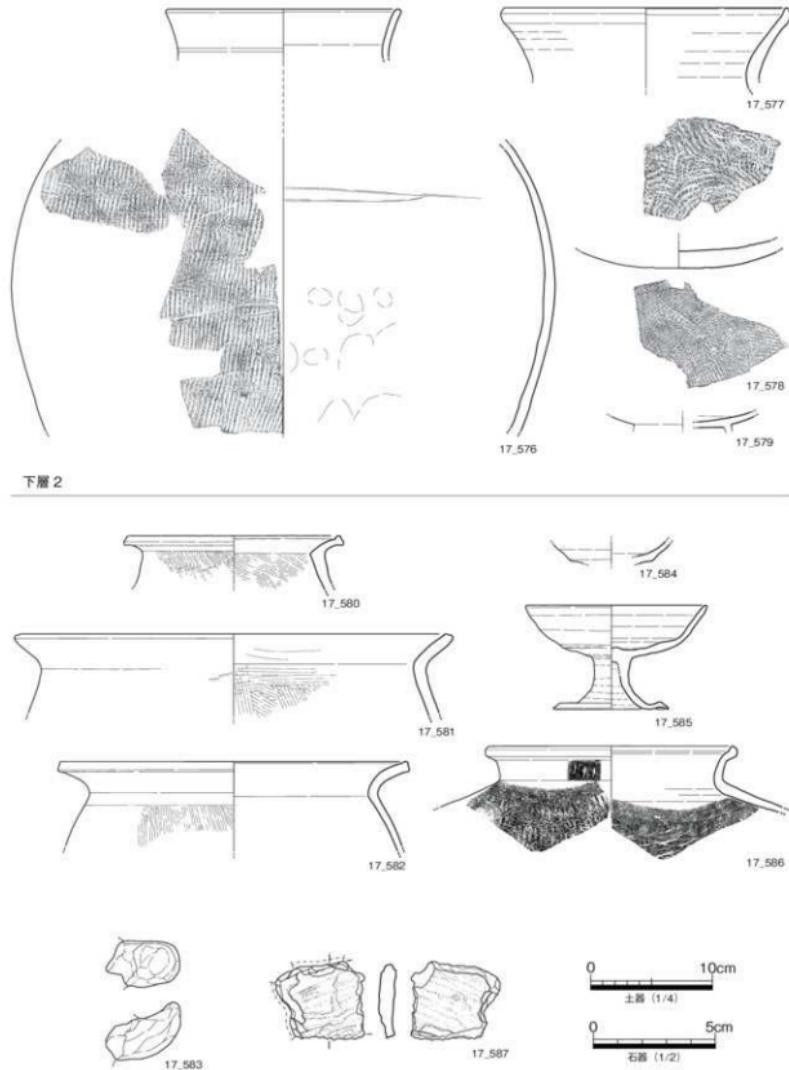


最下層



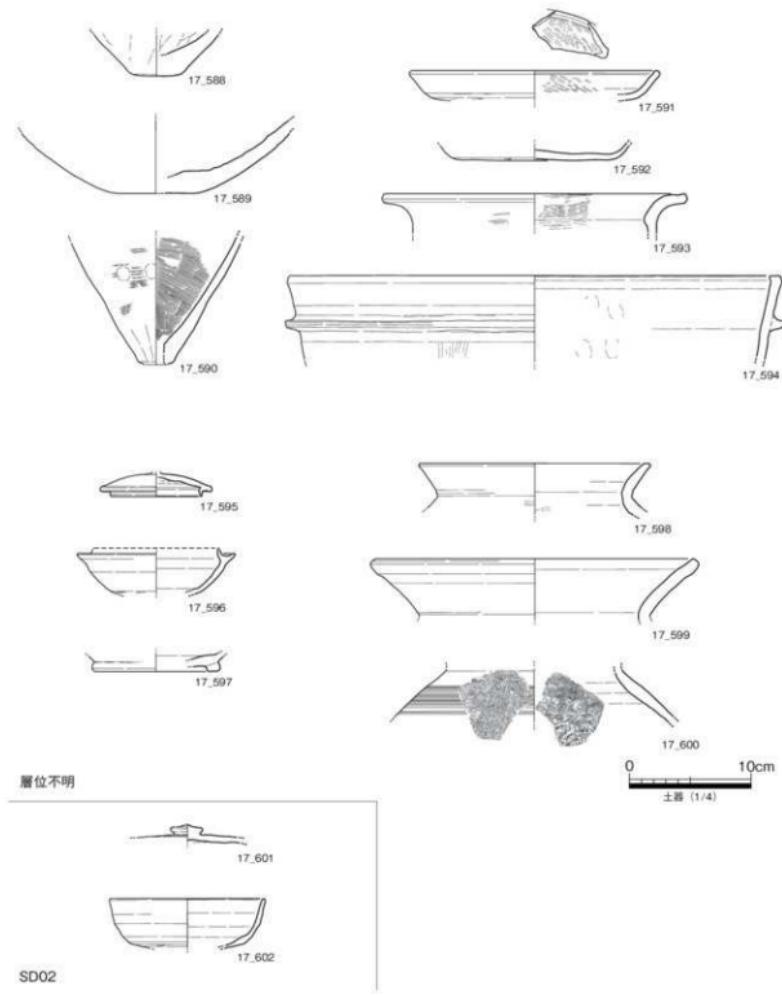
下層 1

第49図 SD02・SX01 遺物実測図1

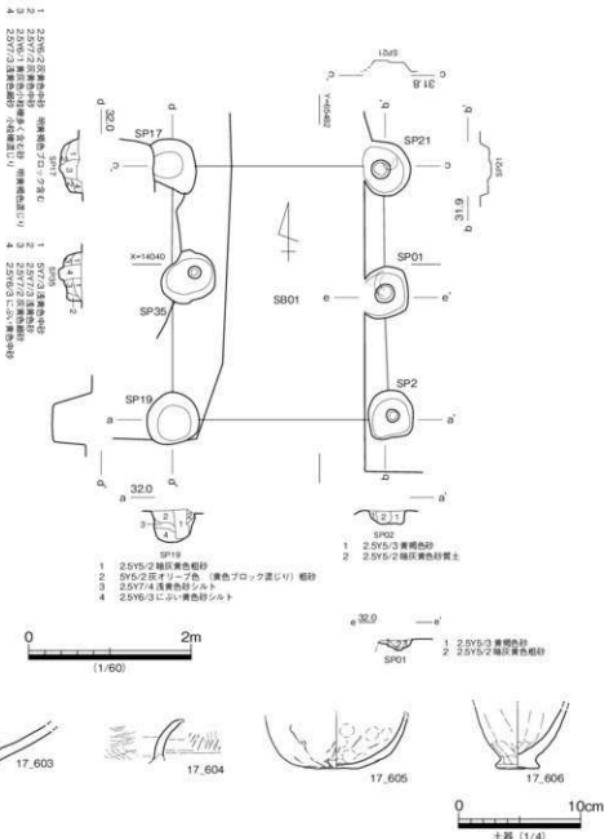


上層

第50図 SD02・SX01 遺物実測図2



第51図 SD02・SX01 遺物実測図3

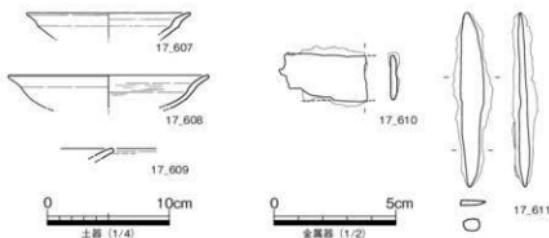
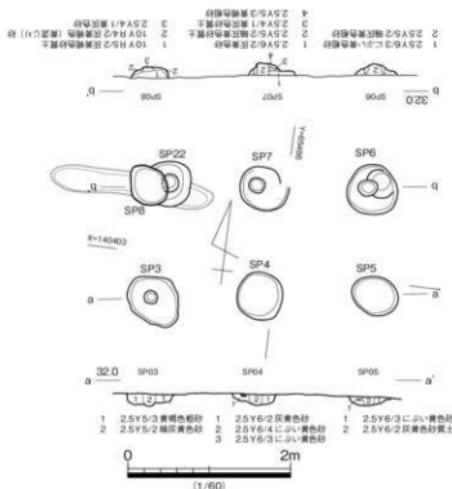


第52図 SB01 平・断面図、遺物実測図

### 掘立柱建物跡

SB01(第52回)

平面規模は、桁行2間（約3.12m）、梁行1間（約2.64m）である。主軸方向は、座標北方向に一致する。出土遺物は弥生土器のみである。SP01から603・604、SP19から605、SP21から606が出土している。SP02から出土した土器のうち、SH03出土の土器と同一個体のものがある（133）。

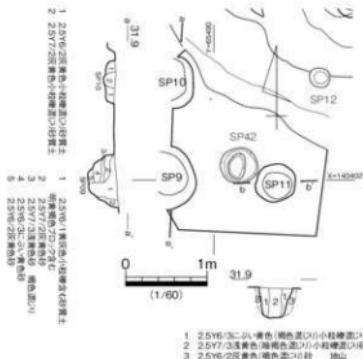


第53図 SB02 平・断面図、遺物実測図

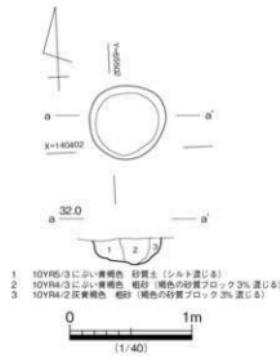
### SB02( 第53図 )

平面規模は、桁行2間（約2.76m）、梁行1間（約1.38m）である。主軸方向はN83°Eである。

SP08は柱痕が見られないことから、SP22の柱抜き取り痕の可能性がある。出土遺物は縄文土器、弥生土器小片及び鉄器である。SP04から出土した土器は607、SP07からは縄文土器5（前掲）、弥生土器608及び鉄刀子610、SP08からは弥生土器609及び鉄刀子611が出土している。



第54図 SB03平・断面図



第55図 SP20平・断面図

### SB03( 第54図 )

現地調査時には建物とは認定していないが、柱痕のあるSP09、10、11の3穴が建物の一部として想定できる。SP09、11が深いことから隅柱となり、南北方向の建物と考えられる。

平面規模は、桁行2間以上、梁行1間(約14m)である。主軸方向はほぼ座標北に一致する。出土遺物は、弥生土器小片のみである。

### 柱穴

#### SP20( 第55図 )

調査区東端付近で検出された。柱痕があることから柱穴と考えられる。これと組み合わさる柱穴は確認されていない。弥生土器小片が出土している。

### 土坑

#### SK01( 第56図 )

7世紀の須恵器612及び繩文土器・弥生土器の小片が出土している。遺構の性格は不明である。

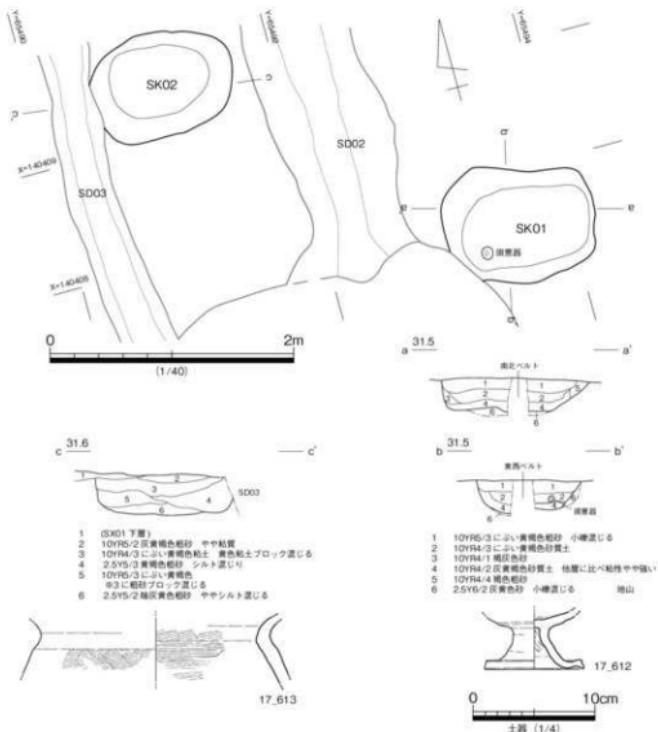
#### SK02( 第56図 )

規模は、SK01と類似している。断面写真では、SD03よりSK02の方が新しく見えなくもないが、SD03より古い。また、SX01下層より古い。弥生土器613及び須恵器の小片が出土している。時期はSK01と同様7世紀頃と考えられる。性格は不明である。

### 溝跡

#### SD03、SX02( 第48・57図 )

SD03は、SX01より古い溝でSK02より新しい。幅約0.5m、深さ約0.25mである。南端が西へ屈曲



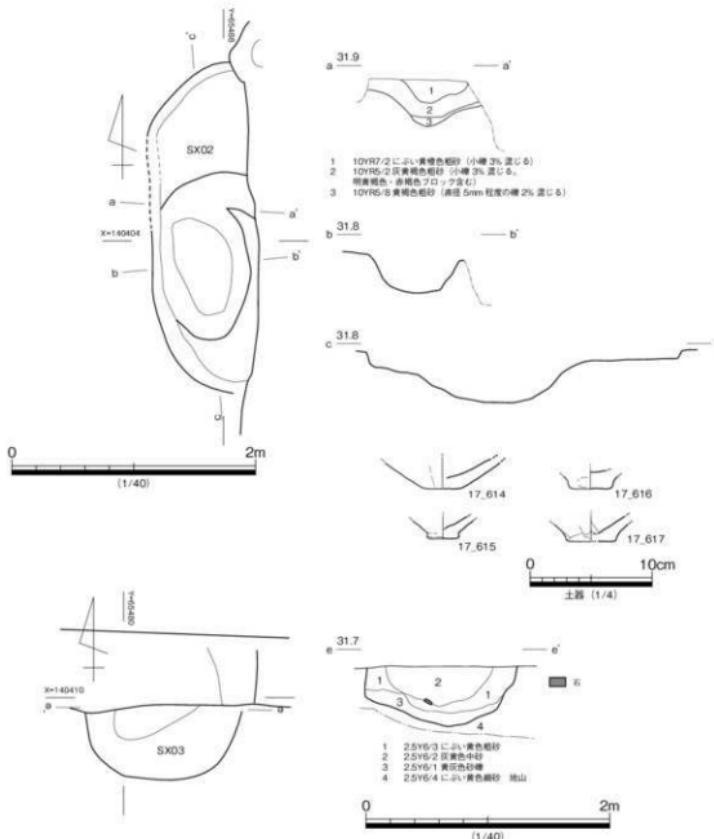
第56図 SK01・SK02 平・断面図、遺物実測図

しており、SX02へ続くよう見える。

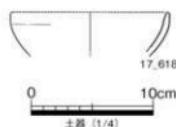
SX02は、中央部分が土坑状に窪む。SD03へ続くとすれば、出水状の遺構の可能性がある。弥生土器、須恵器が少量出土している。当初はSH04としていた。614～617は弥生土器である。

#### SD04（第58図、第48図下段断面図1層）

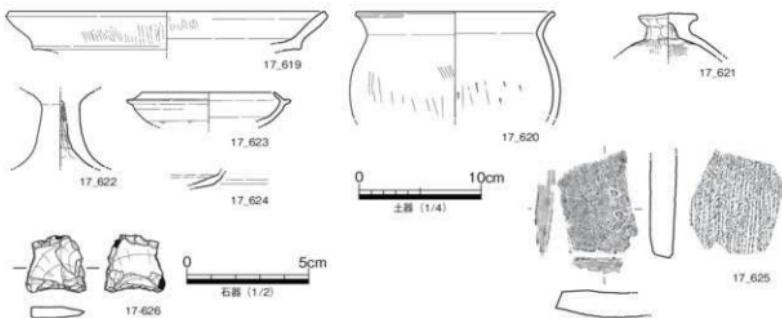
調査区北端で検出されたが、南側への延長部は不明である。幅約1m、深さ約0.2mである。SX01下層より古い埋土である。当初はSH06として調査を行っていたが、SD04へと変更した。須恵器、土師器及び弥生土器の小片が出土している。618は土師器杯である。



第57図 SX02・SX03 平・断面図、遺物実測図



第58図 SD04 遺物実測図



第 59 図 出土位置不明遺物実測図

#### 不明遺構

SX03( 第 57 図 )

北側は後世のかく乱によって破壊されている。弥生土器小片が 1 点のみ出土している。

#### (4) 出土位置不正確な遺物

第 59 図は、機械掘削中や排土中など出土位置が不明確な遺物である。619～621 は弥生土器である。622 は土師器である。623・624 は須恵器である。625 は今回の調査で唯一出土した瓦で、平瓦である。626 は、試掘トレンチ跡から出土したサヌカイト製の楔形石器である。

#### 4 平成 17 年度調査総括 ( 第 60 図 )

平成 17 年度調査区では、3 つの時期の遺構・遺物が確認された。

##### 縄文時代

明確な遺構は検出されていない。縄文中期末から晩期までの土器及び石器が出土している。遺物の分布は、調査区東半、特に東端部に集中する。

##### 弥生時代後期後半～終末

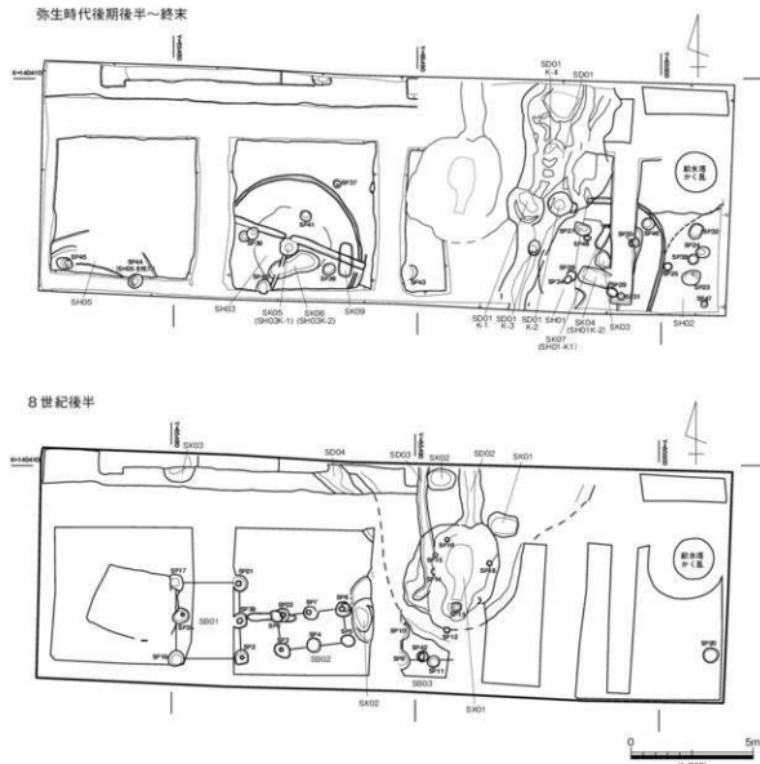
外面タキ調整の甕、小型の鉢が出土していることからいずれも遺構も弥生時代後期後半～終末の時期と考えられる。遺構の変遷としては

旧 新

SD01 → SH01

SH02 → SH01

また、SH03 は平面形が円形で、SH01 は隅丸方形であることから、SH03 の方が古い可能性がある。SD01 で出土した土器製作用の粘土や焼成時に破裂した破片の廃棄は、この調査区内でいえば、SH02 あるいは SH03 の居住者がかかわったものと考えられる。



第60図 平成17年度調査区遺構変遷図

## 8世紀後半

旧南海道は、石田高等学校北側の旧長尾街道の位置に推定されており、条里方向もこれと合致することから、高校の校舎の方向（今回の調査区の方向）がおおむね条里方向となる。SB01とSB03はおおむね条里方向と合致するが、SB02の主軸はややずれる。いずれの建物も出土遺物は縄文土器や弥生土器であることから遺物からの時期決定はできない。また出土状遺構のSD02、SD03は北へ条里方向に合致して延長している。ここでは、これらの建物跡はこの出土状遺構との関連があるとみて、8世紀後半頃のものとしておく。

## 中世

SX01 最上層や遺構へ混入品として中世の遺物がわずかにみられるが、遺構は確認できていない。

## 第2節 平成21年度調査

### 1 調査の方法

発掘作業員を直接雇用して調査を実施した。

平面図の作成は、手書きとトータルステーションを使用した遺構実測支援システム「遺構くん」を併用して行った。断面図は、手書きで作成した。写真撮影は、デジタルカメラを中心に、一部6×7のモノクロフィルム及びポジフィルムで実施した。

調査は発掘に伴う掘削土の置き場が十分に確保できなかつたことから、調査区を東西に2分して、半分調査を終了したところで埋め戻しを行い、その後残りの半分の区画の調査を実施した。

### 2 層序(第64・65図)

調査区全体にわたり、現代のかく乱が多く、基本層序が把握しがたい部分が多いが、西調査区東壁断面が本来の姿を留めているものと考えられる。現地表下約35cmで遺構検出面となつてゐる。今回の調査で検出された遺構の時期は、弥生時代から中世の3時期があるが、いずれの時期の遺構もこの面で検出されている。

### 3 遺構、遺物

今回検出された遺構の時期は、弥生時代中期後半、7世紀後半及び中世の3時期(第61～63図)がある。遺物については、このほか縄文時代晩期の突帯文土器が出土している。

#### (1) 弥生時代中期後半

土坑1基が単独で検出されている。この時期の遺構はほかには無い。

#### SK05(第66図)

壁面が垂直の円形の土坑である。井戸あるいは貯蔵穴の可能性も考えられる。平面図では下層での土器出土状況を示している。

縄文時代晩期及び弥生時代中期後半新段階の土器2が出土している。1～4は下層から出土した弥生土器である。5～7は縄文時代晩期の土器である。

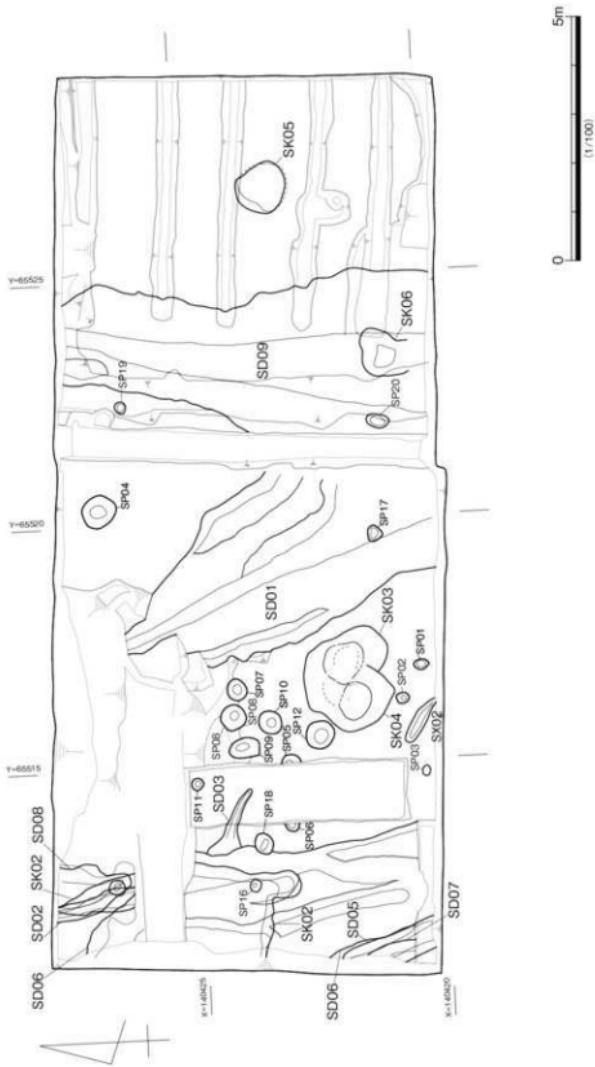
#### (2) 7世紀後半

大溝3条を中心とした溝跡を検出している。

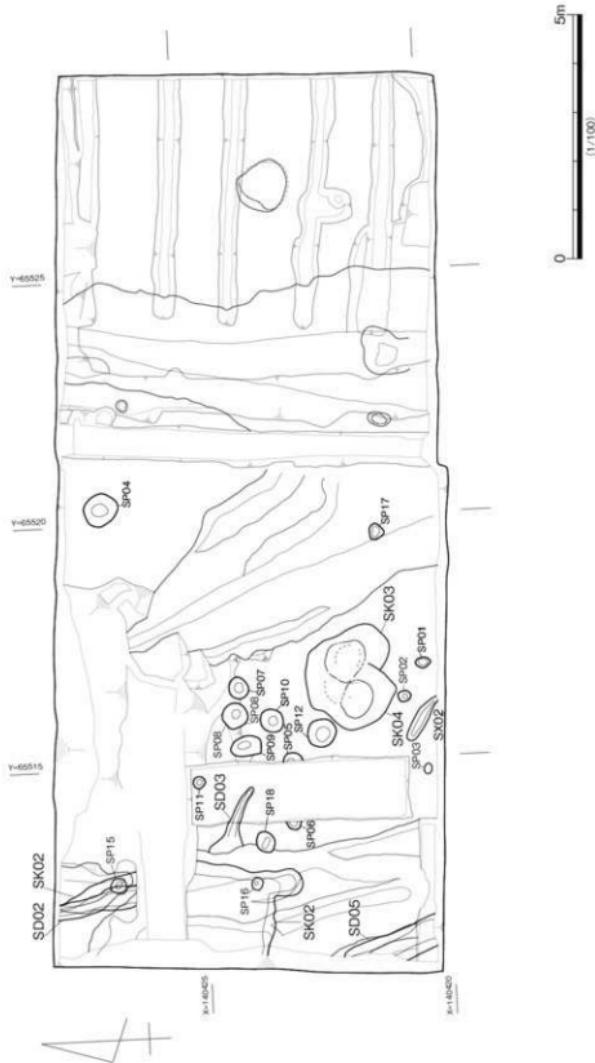
#### SD01(第67・68図)

調査区中央部で南東から北西方向への溝跡である。北端部は現代のかく乱で破壊されている。下部には砂の堆積がみられる。大型の水路である。北半部の③層では一部土器片が集中している箇所が見られた。

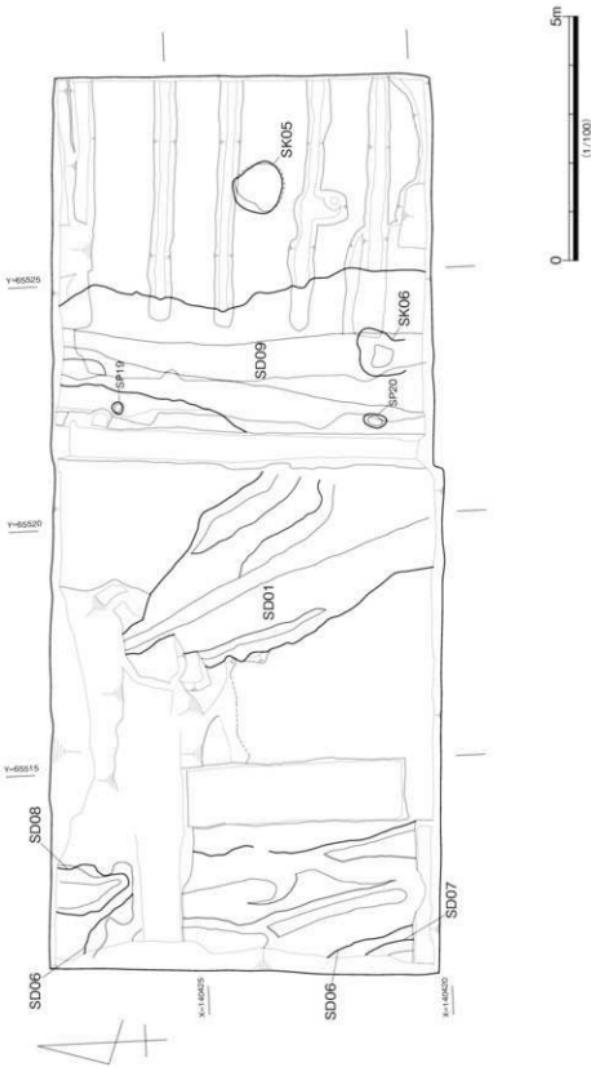
土師器・須恵器については、出土層位④層より上と④層に分けて掲載する。8～22は④層より上から出土した土器である。8～13は土師器である。14～22は須恵器である。14は壺蓋の可能性がある。23～31は④層から出土した土器である。23は土師器甕である。24～31は須恵器である。24は高杯の可能性がある。27は壺蓋の可能性がある。10はSD09出土破片と接合した。20はSD06出土破片と接合した。



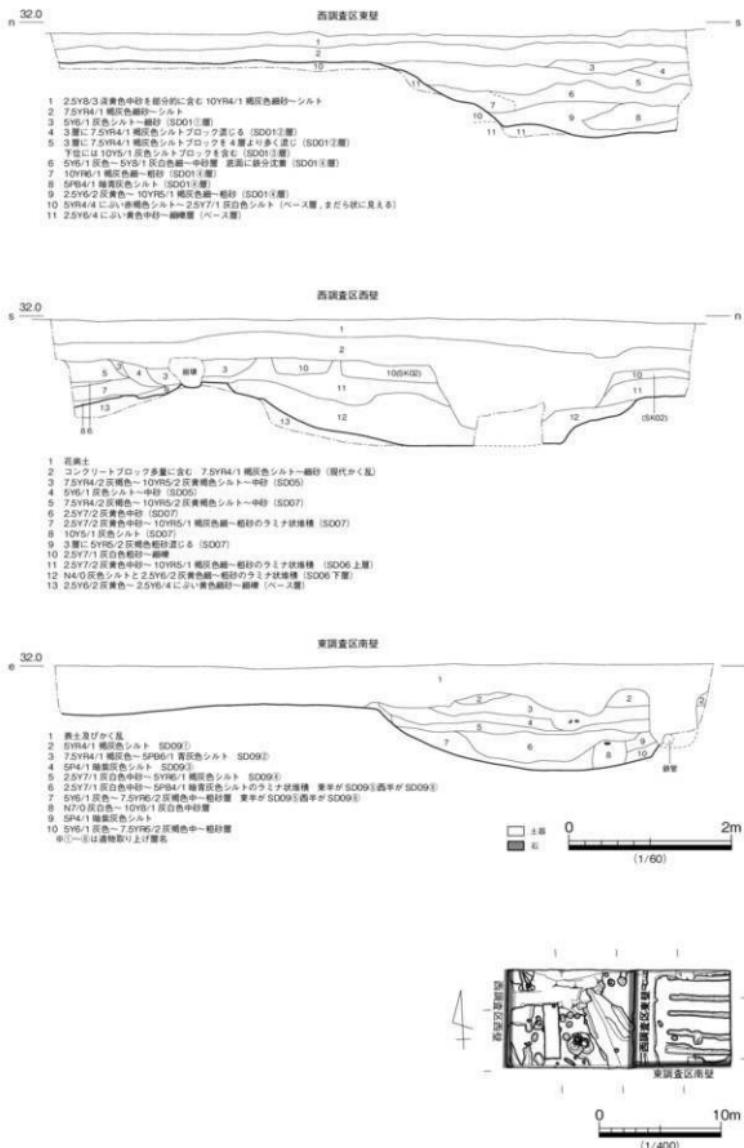
第61図 全体図(平面)



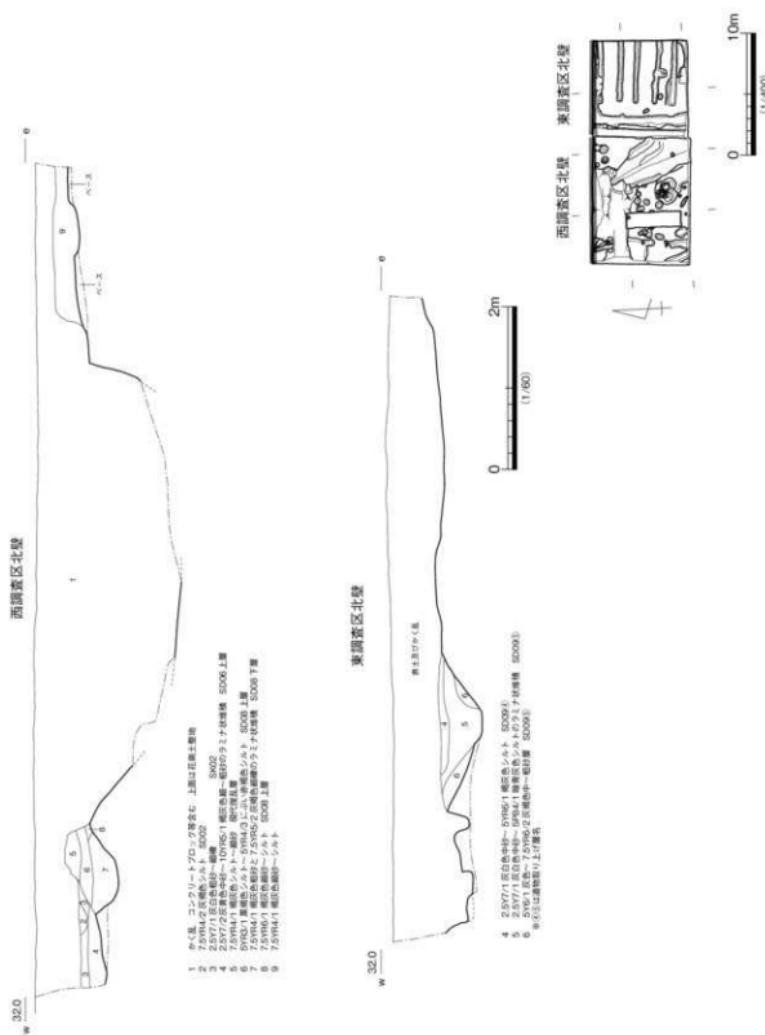
第62図 全体図（上層）



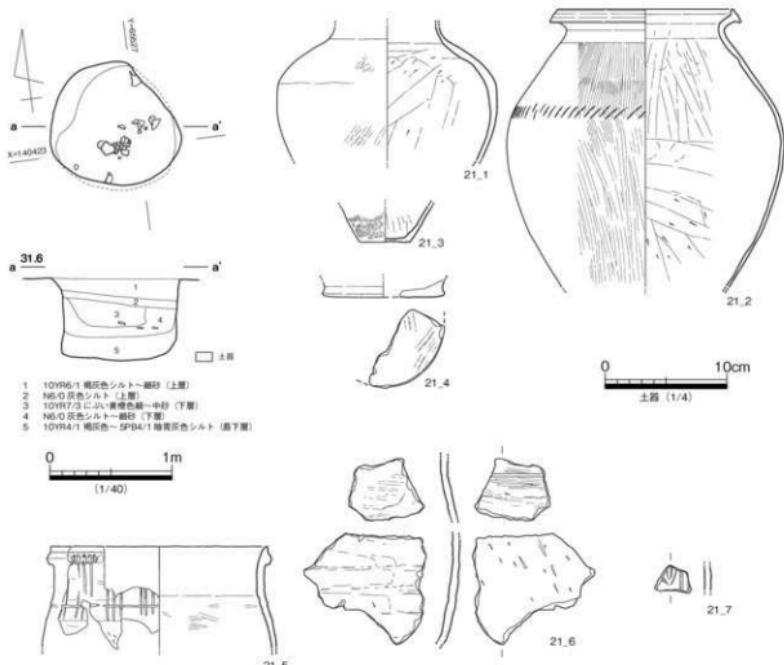
第63図 全体図（下層）



第 64 図 西調査区西・東壁、東調査区南壁断面図



第65図 調査区北壁断面図



第66図 SK05 平・断面図、遺物実測図

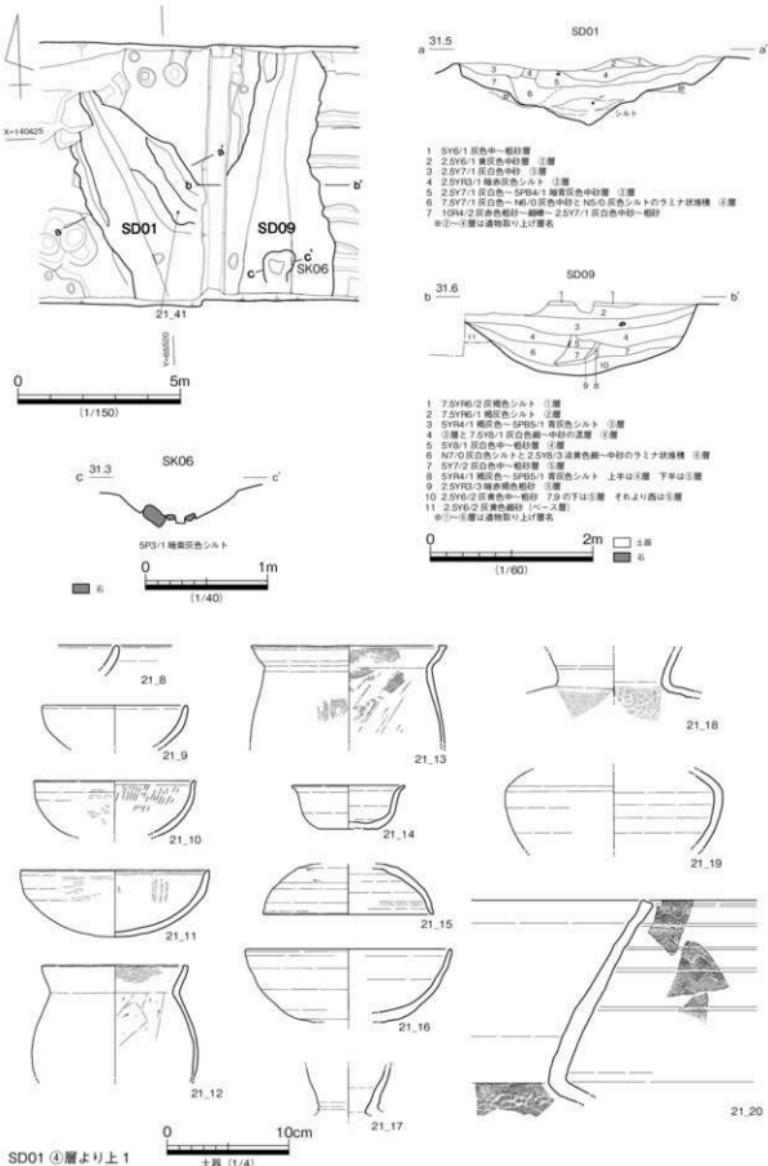
32～36は縄文土器で、32～35は縄文時代晚期の突帯文土器である。37～39は弥生土器である。土器以外では、40はサヌカイト製の石錐である。41は銅鏡で、いずれも弥生時代のものである。

SD01の時期については、④層出土須恵器の年代観から7世紀後半と考えられる。

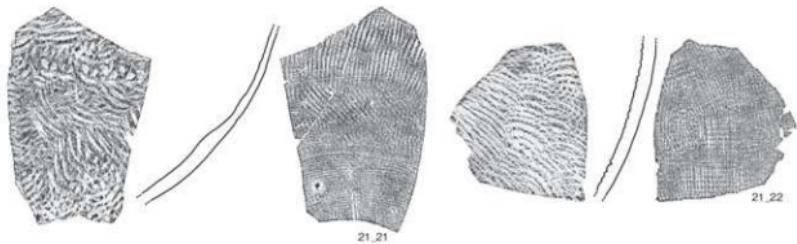
#### SD09(第67・69～71図)

ほぼ座標北方向に沿う大型溝である。下部には砂の堆積が見られる。土層断面からは複数回の再掘削が観察されるが、現地調査の際には再掘削は認識できていない。SD01とはほぼ同じ規模で、底面の標高もほぼ同じである。SD01と南端で重なるが、この部分は現代の鉄管の埋め込みによりかく乱されており、新旧関係は検証できなかった。

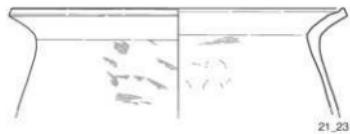
出土遺物については、土層断面図と取り上げ層位⑤層と⑥層は明確に対照できないことから、まとめて報告する。また、「上層」「下層」についても土層断面図との対応が明確ではないことから、取り上げ層位とは区別して報告する。また、「上面」出土遺物と土層断面図との対応も同様であることから、「上面」出土遺物は「上層」出土として掲載する。



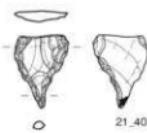
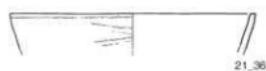
第67図 SD01・SD09平・断面図、遺物実測図1



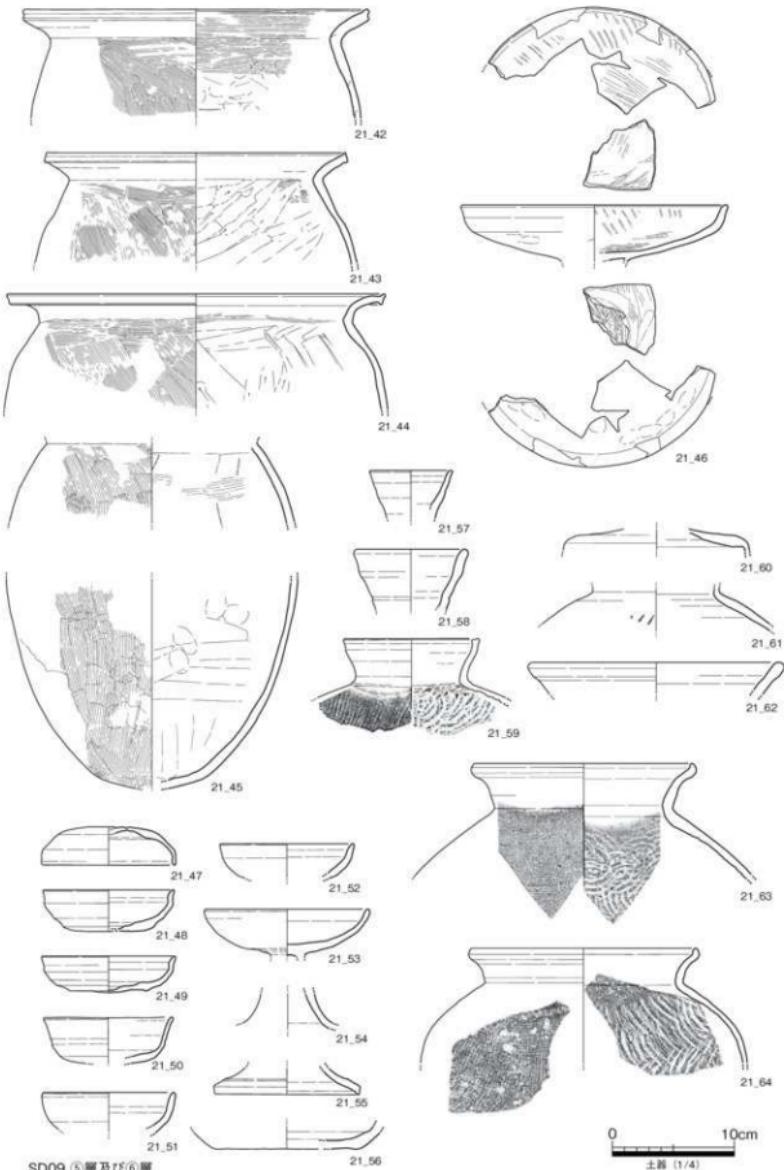
SD01 ④層より上 2



SD01 ④層

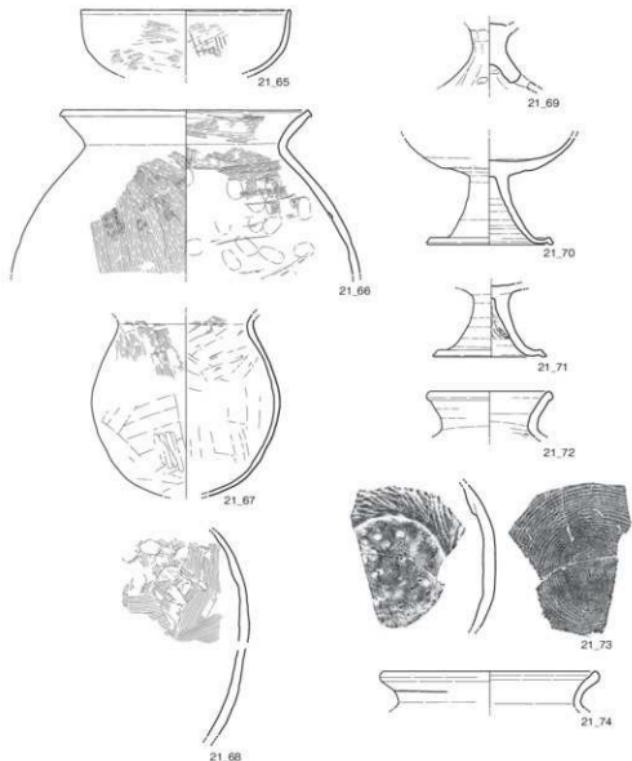


第 68 図 SD01 遺物実測図 2



SD09 ⑤層及び⑥層

第69図 SD09 遺物実測図1

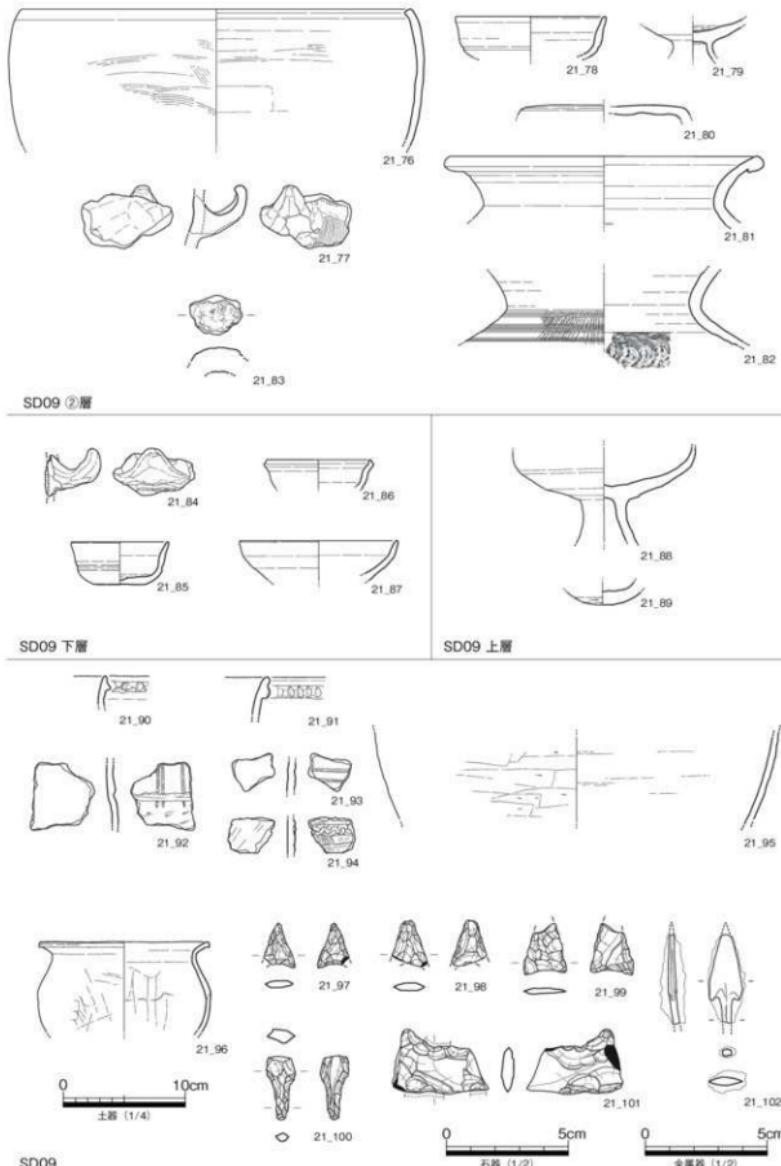


SD09 ④層



SD09 ③層

第 70 図 SD09 遺物実測図2



第71図 SD09遺物実測図3

42～64は、⑤層及び⑥層出土土器である。42～46は土師器である。47～64は須恵器である。59は横瓶である。65～74は④層出土土器である。65～69は土師器である。70～74は須恵器である。72は横瓶である。75は③層出土須恵器である。76～83は②層出土遺物である。76・77は土師器である。78～82は須恵器である。83はふいごの羽口である。84～87は「下層」出土土器である。84は土師器である。85～87は須恵器である。88・89は「上層」出土須恵器である。89ははそうである。90～95は縄文土器である。90～92は縄文時代晚期突帯文土器である。96は弥生土器である。

土器以外の遺物としては、サスカイト製石器97～101及び銅鏡102が出土している。

出土遺物からは、SD01との時期差は認められない。

#### SK06( 第 67・72 図 )

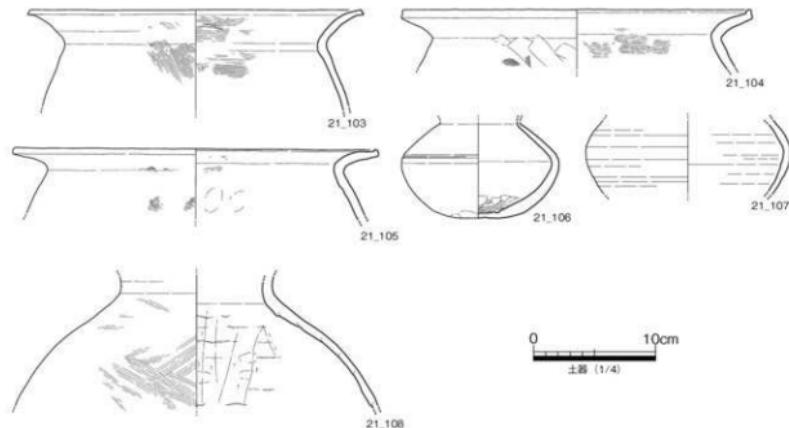
SD09埋土掘り下げ中に検出したものである。SD09とは関係のない遺構かどうかはやや疑問であるが、遺物がまとまって出土した。SD09 ④層上面が検出面となり、底面標高は SD09 ⑤層とほぼ同じである。

出土遺物は SD09 と接合するものが多い。103～105は土師器である。106・107は須恵器である。108は弥生土器である。

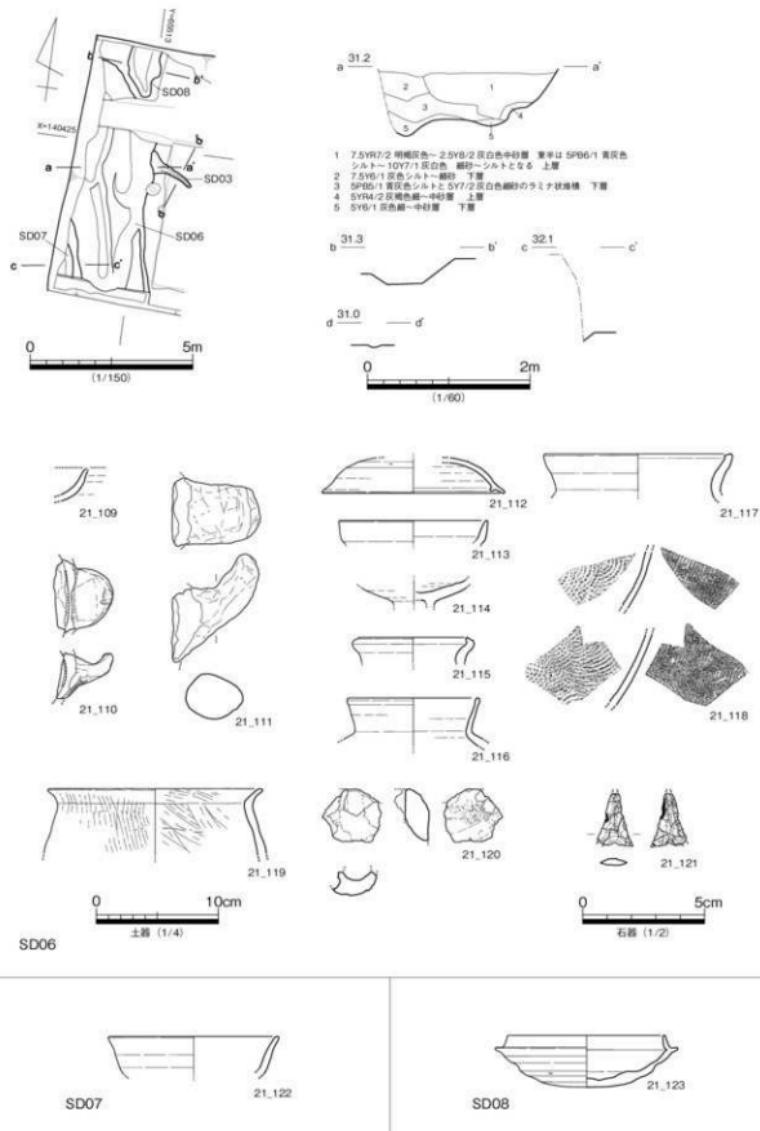
#### SD06( 第 73 図 )

調査区西端で検出した大溝である。座標北よりやや西の方向へ向く。溝底面の窪みが2か所あり、土層断面図からも再掘削されていることがわかる。SD01、SD09 とほぼ同じ規模で、底面の標高もほぼ同じである。SD08より新しい。

109～121が出土している。109～111は土師器である。112～118は須恵器である。119は弥生土器か。前掲須恵器甕20はSD06から出土したものが、SD01出土片と接合したものである。120はふいごの羽口である。121は石鏡である。



第 72 図 SK06 遺物実測図



第73図 SD03・SD06・SD07・SD08 平・断面図、遺物実測図

#### SD07（第73図）

調査区南西部で検出した溝跡である。最深部までは検出できていないと考えられるが、SD01、SD09、SD06と同様な規模の可能性がある。須恵器杯122が出土している。

#### SD08( 第 73 図 )

調査区北西隅で検出した。SD06より古い溝跡である。南側には延長しない。須恵器杯123が出土している。

#### (3) 中世

##### SK02（第74図）

調査区北西隅で検出した。方形の平面形で、南東隅が一部溝状に南へ張り出す。埋土から弥生土器、須恵器小片が少量出土している。SD06より新しい。実測可能な遺物は無い。

##### SK03、SK04（第75・76図）

SK03とSK04は、埋土の土質による前後関係は把握できないが、石組の状況からはSK04の方が新しいと考えられる。SK04の石（第75図でスクリーントーンを掛けたもの）がSK03の石組みの上に重なっている。小型の井戸と考えられる。

SK03は底面に石を敷き詰めており、その石の下には、完形に近い瓦器椀124が口縁部を下にして置かれている。また、表面の色彩が美しい石がその隣にあり、祭祀的な趣が認められる。

SK04は南側の石列の配置が乱れており、崩れているものと考えられる。この南側石列のすぐ南側で130が出土している。直方体の形状であることから本来はSK04の南側石列を構成していた可能性がある。

SK04からは、125～131が出土している。125～127は土師器である。128は須恵器である。129は黒色土器B類椀である。130・131は井戸の石組みに転用されたもので、130は凝灰岩（火山石）で上面・側面は黒色を呈する部分があり、熱を受けたものと考えられる。建築材の可能性がある。131は凝灰岩（火山石？）で石幢（笠部）と考えられる。

遺構の時期は、瓦器椀124から12世紀第3四半期頃と考えられる。

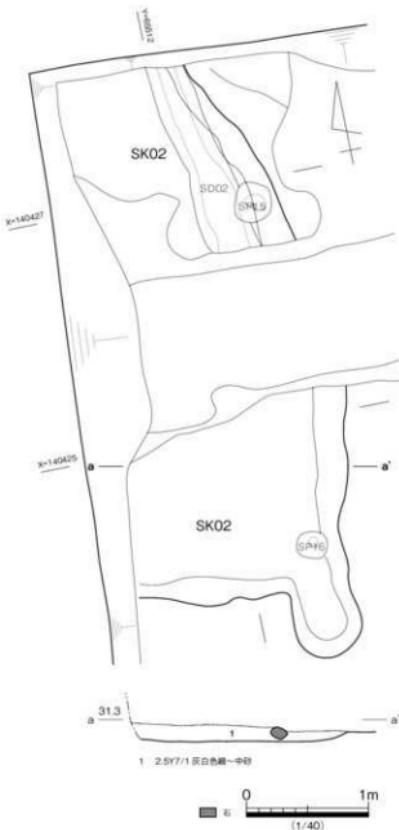
\*130・131については、大川広域行政組合松田氏からご教示を得た。

##### SD02( 第 77 図 )

調査区北西部で検出されたSK02、SD08より新しい溝跡である。南側への延長は明確ではない。ただ、SK02の南東隅が溝状に南へ伸びており、これがSD02の延長の可能性があるが、現地調査の際には確認できていない。出土遺物は弥生土器、土師器の小片が出土している。132は土師器椀である。

##### SD03( 第 73 図 )

現地調査時点では、この溝はSD06より古いものと考えていたが、出土遺物に中世の遺物があることから、SD06より新しい可能性が大きい。SD06との関係は現在では不明である。実測遺物は無い。



第74図 SK02 平・断面図

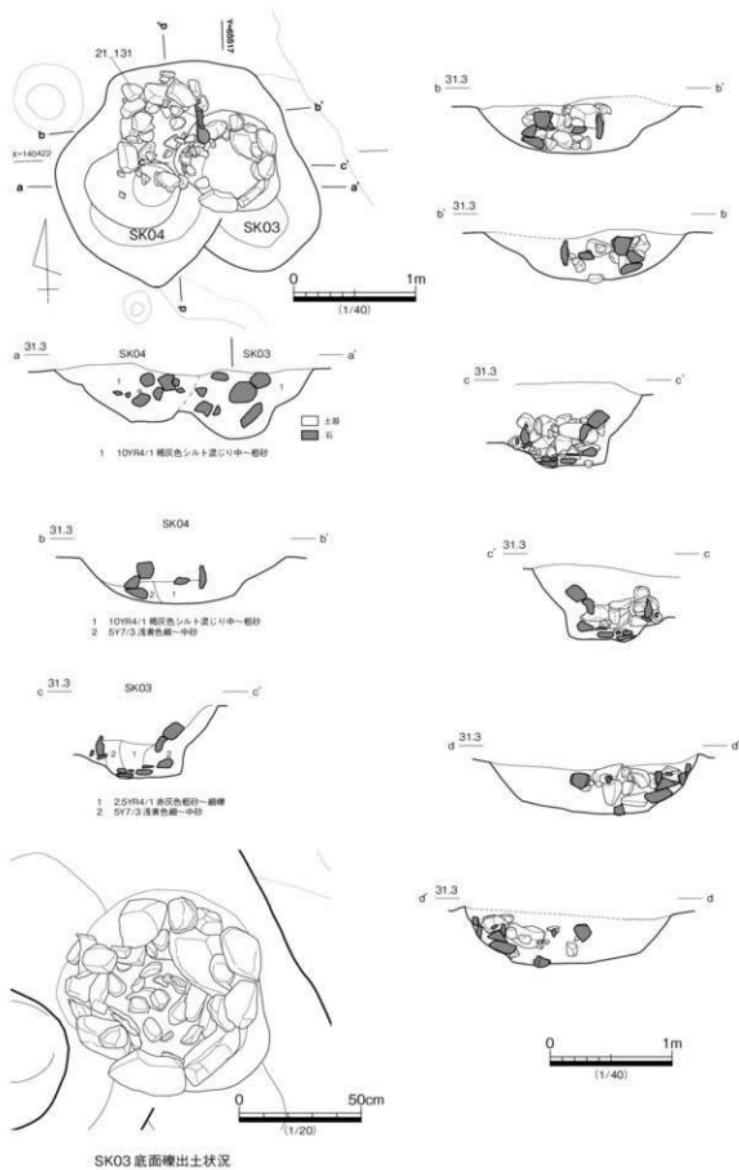
## SD05(第78図)

調査区南西隅で検出した。SD07と同じ方向、位置である。弥生土器、須恵器、土師器が少量出土している。SD07より新しく、埋土が灰白色を呈することから中世頃のものと考えられる。実測遺物は無い。

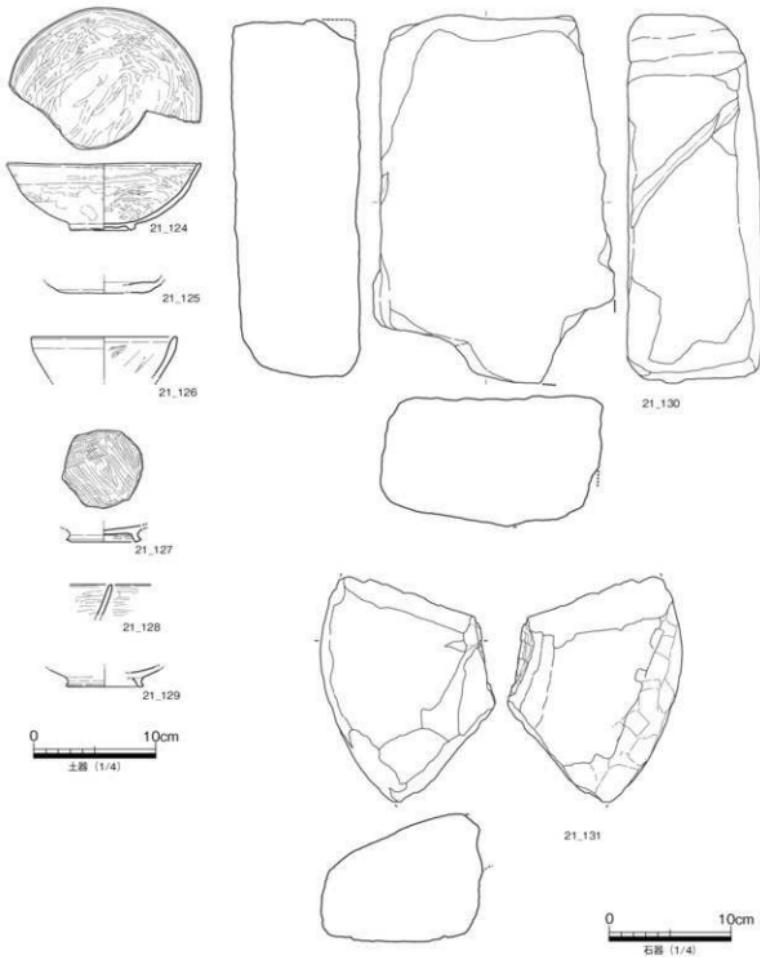
## (4) その他の遺構、包含層等からの出土遺物(第79図)

133は中世のピットと考えられるSP08から出土した土師質土器皿である。

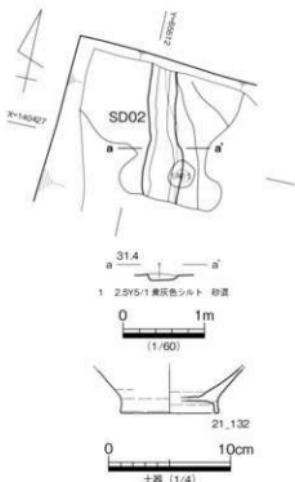
包含層及びかく乱出土の遺物として、134・135は、繩文土器である。136は弥生土器皿である。137は脚が面取りされた古代の赤彩の高杯である。138はSD02下の灰白色砂層(SK02の可能性あり)から出土した平瓦である。凸面に格子タタキが見られる。139は中国産龍泉窯系青磁碗I・4類である。



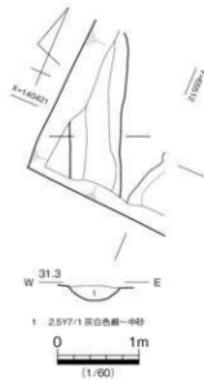
第75図 SK03・SK04 平・断・立面図



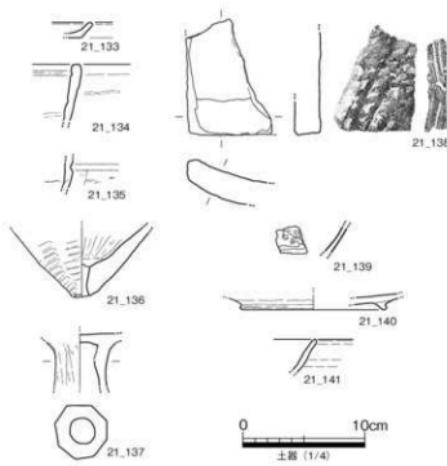
第76図 SK03・SK04 遺物実測図



第77図 SD02 平・断面図、遺物実測図

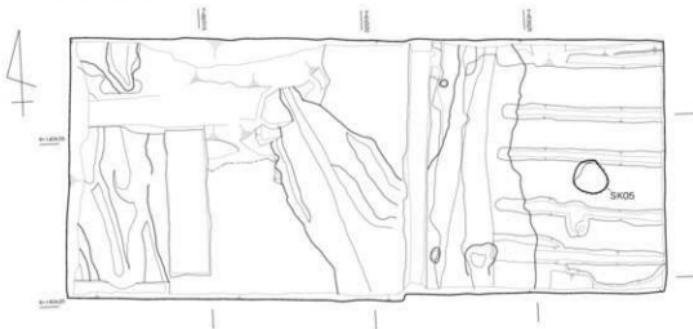


第78図 SD05 平・断面図

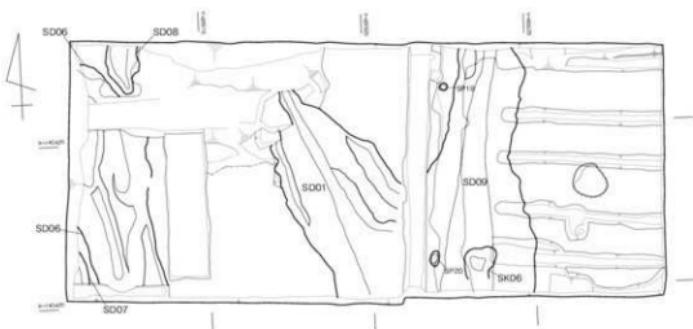


第79図 その他の遺構・包含層出土遺物実測図

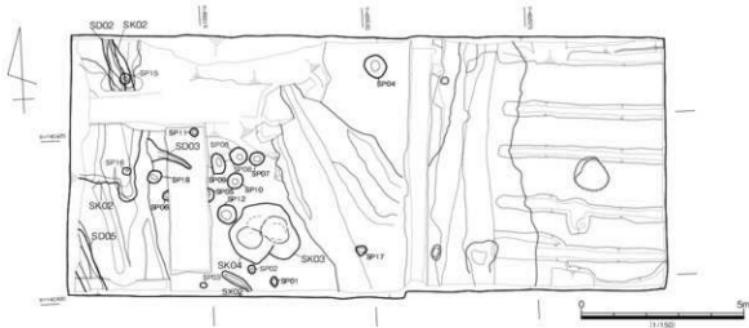
弥生時代中期後半



7世紀



中世



第 80 図 平成 21 年度調査区遺構変遷図

140・141は土師器である。

#### 4 平成21年度調査総括（第80図）

弥生時代中期後半

貯蔵穴のような形状の土坑が1基検出されているのみである。この調査区では建物跡は検出されていない。近くの調査区で建物跡が検出されているのは、平成17年度、平成10年度及び平成5年度調査区があるが、いずれも弥生時代後期後半から終末期である。

なお、弥生時代後期以降の遺物と考えられる注目すべき遺物として、弥生時代の遺構からの出土ではないが、銅鏡2点がSD09及びSD01から出土している。

※銅鏡については、信里芳紀「第3節弥生時代中期から古墳時代前期の金属器」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2巻 旧練兵場遺跡II（第19次調査）第二分冊』2011 香川県教育委員会 独立行政法人国立病院機構善通寺病院 を参考にした。

#### 7世紀

7世紀後半頃と考えられる大型溝跡が3条検出されているが、この北側の延長は、平成5年度調査区では明確には検出されていない。ただ、SD09の北の延長線上に平成5年度調査区1区の東端にあるSK12が位置している。このSK12は直線的な平面形をもち、7世紀中葉頃のものとされていることから、SD09の延長部の西肩部の可能性はある（第145図）。

#### 中世

注目できる遺物として、SK04から出土した凝灰岩製の石轆（笠部）がある。当遺跡での出土事例は、県内の同類の石造物の編年の1点を示すものとして重要とされている。

※大川広域行政組合松田氏にご教示による。